

# 大学生の過去の転校経験に対する意味づけ

## —転機としての環境移行—

下田千尋<sup>1</sup>・荻野美佐子<sup>2</sup>・岡本祐子<sup>1</sup>

University students' meaning-making for the experience of past school transference

Chihiro Shimoda, Misako Ogino, and Yuko Okamoto

While school transference is a critical environmental transition, it can also become a chance. The purpose of this study is to investigate university students who had the experience of transferring schools during their former school days and find how they reviewed such environmental transitions and constructed meaning for the experience. 166 university students participated in this study, and 66 of them experienced school transference. They completed free-description questionnaires about the experience and the meaning-making for it. In addition, we examined the relation between the meaning-making for school transference and their friendship style, because making friends in a new environment is a serious problem for students after school transference. As a result, many participants found that they held positive meanings for their past school transferences, which were divided into six categories: 1) effect on character, 2) effect on skills and sense of value toward human relationships, 3) change in the sense of value and the world, 4) trigger to something new, 5) effect on career decisions, and 6) switching something negative to positive.

Key words: School transference, Environmental transition, Chance, Meaning-making

### 問題と目的

#### 1. 転機とは

人は人生においていくつもの「転機 (turning point)」を経験し、それを通じて成長していく。杉浦 (2004) は転機を「自分や他者に対する見方を大きく転換させ、時には世界を全く異なった視点から見るができる」きっかけであると定義した。これは「危機 (crisis)」とよく似た概念である。転機と危機はどちらも人生の節目となる出来事や、それに伴って経験する変化のプロセスを示す概念であり、両者はしばしば同じ出来事に対しても用いられると思われる。しかし危機が良い方

---

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科

<sup>2</sup> 上智大学総合人間科学部心理学科

向（成長）にも悪い方向（破局）にもつながりうる分かれ目（山本・ワップナー, 1992）を単純に指しているのに対し、転機は危機に対して積極的な意味を与えようとする（杉浦, 2004）であり、自分に成長をもたらした出来事として危機を捉えることである。つまり転機という言葉には、危機が自分にとってどのような経験であったかという意味づけが含まれていると言える。その転機としての意味づけは、今の自分につながる成長の契機として前向きなものと捉えられることが多い。

転機は前述の通り、その出来事によって生ずる変化のプロセスを示すものであり、特定の時点における一つの出来事のみを示しているのではない。このことから杉浦（2004）は、転機とされたきっかけから今に至る一連の出来事を「物語」として扱うことによって、発達変化のプロセスを捉えることができると考えた。さらに「転機の物語」を今ここで再構成して語ることは、成長の自己認識を促し、現在の心の在り方や志向性を表すものであると指摘している。では、人は過去に経験した危機を振り返ったとき、そこにどのような意味を付与し、転機として語るのだろうか。

## 2. 転校という環境移行

転校となる出来事は人によって様々であるが、本研究では転校という一つの環境移行に注目する。環境移行とは「人生の出来事や移動によって環境が変わること」（山本・ワップナー, 1992）であり、移行の前後には大きな変化が生じるとされる。特に本人が予期できない環境移行では、本人や周囲の人に及ぼすインパクトがより大きいと考えられる。

転校は「それまでの住み慣れた地域社会や学校を離れ、新しい環境に適応することを余儀なくされる」（古川・小泉・浅川, 1992）ことであり、一つの環境移行として捉えることができる。さらに多くの場合、転校は親の転勤など子ども自身は統制することのできない原因によって突然生じる。また通常の学年移行と異なり、クラスの中で一人だけ環境の変化を経験しなければならない。したがって子どもにとって転校は、ときに危機的な移行となりうると考えられる。

塚本（1990）は、転校が従来ネガティブな出来事とされていたと指摘し、「転校生に対しネガティブな見方をすること自体が、転校生にマイナスの作用を与えている」と主張している。一方で古川・小泉・浅川（1992）は、転校がマイナスの側面だけでなくプラスの側面ももつものであるとし、転校のもつプラスの側面に注目した研究の必要性に言及している。本研究では目的①として、転校に対して一般的に共有されるイメージから、転校がどのような環境移行であるのかを検討する。具体的には大学生を対象に調査を行い、転校にはどのようなネガティブ／ポジティブな要素があると認識されているのか、また転校は本当に危機的な移行であるのかについて検討する。

## 3. 転機としての転校経験

転校という事態に焦点を当てた従来の研究は、実際に転校生のいるクラス全体を対象として調査を行っている。転校生と他の生徒との比較を縦断的に行うことによって、転校生が他の生徒と同等のレベルになっていくという適応の過程を示したものが多く見られる。たとえば横島（1976）は小中学校において、4月以降に転校した生徒に対して7月と10月にソシオメトリックテストを実施した。その結果、転校生のクラス内地位が7月から10月にかけて上昇し、転校後約半年で友達関係が安定することが示された。さらにその後の面接調査から、転校経験者は転校先で少しずつ友達関係を築いていくことができている、転校を初めて経験する生徒よりも適応に有利であることを示唆し

た(内野・横島, 1977)。また小泉(1986)は転校生のいるクラスにおいて、4月から7月まで4回にわたり調査を行った。その結果、転校生の友達や教師との交流の程度は、4月と5月には他のクラスメイトより低いものの、6月中旬にはその差がほぼなくなることが示された。さらに同時に行われた心理的距離地図の結果からも、転校生は初めの1, 2 か月は友達関係が大きく変動するものの、6月には他のクラスメイトと同じくらいに友達関係が安定することが示唆された(小泉, 1987)。

以上のように、転校生が新しい学校にどのように適応していくのかについて、対人関係を表す指標をもとに検討する研究が行われてきた。しかし転校生自身が転校をいかに経験しているか、またその経験が自分にどのような影響を与えたのかなど、転校生の主観的な経験を扱ったものは少ない。

一方で横島(2012)は、著名人の転校経験や小中学生の作文等を集め、転校が転機として自己の飛躍をもたらさうと主張している。転校生にとって転校は単なる危機的な環境移行であるだけでなく、その一連の出来事を通じて自己の変化や成長を経験していると考えられる。さらに転校経験を振り返った時には、その出来事に何かしらの意味づけを与え、自分の人生において重要なライフイベントであったと捉えていると予想される。そこで目的②として、大学生が過去の転校経験を振り返った時に、転機として、あるいは自己の変化をもたらした経験として転校をいかに意味づけるのかを検討する。

#### 4. 転校への意味づけと友達関係

転校を経験した大学生4人に予備的なインタビューを行ったところ、転校への意味づけの仕方は様々であり、転校を対人関係の広がりや契機としてポジティブに捉える人もいれば、長期的につきあう友達が少ないとしてネガティブに捉える人もいた。しかし全員が転校に伴うストレスフルな経験として、友達との別れと出会いを挙げていた。すなわち転校を経験した人にとって、転校による友達関係の変化は大きな出来事として受け止められていると言える。転校生は「すでに友人関係網が存在している中で、自らのネットワークを築いていくことを余儀なくさせられる」(小泉, 1997) ため、一般の生徒以上にクラス内の友達との関係性が問題になると考えられる。したがって転校経験においては、友達関係が大きな位置を占めており、友達関係の変化に対して良いイメージを持てば転校経験そのものもポジティブに捉えることができ、逆に悪いイメージを持てば転校経験もネガティブなものとして意味づけると考えられる。

さらに本研究では、転校が実際に起こっている時点ではなく現時点から見た時の、転校への意味づけを扱う。したがって現在の価値観や志向性がそこに表れると考えられる。つまり過去の転校経験を振り返っていかに意味づけるかを考えるとき、現在の友達関係への志向性が影響する可能性がある。言い換えると、より広い友達関係を好む人にとって、転校は様々な人と出会うきっかけであったとしてポジティブな面が強調され、反対に特定の人と深くつきあうことを好む人にとっては、転校は大切な友達との別れのきっかけとしてネガティブに捉えられると考えられる。そこで目的③として、調査対象者である大学生の友達関係への志向性と転校への意味づけとの関連を検討する。

#### 5. 本研究の目的

以上より本研究の目的は、①転校に対して共有されるイメージから、転校がどのような環境移行であるかを探索的に検討すること、②転校経験者の転校への意味づけを探ること、③意味づけの要

因の一つとして現在の友達関係に対する志向性との関連を検討すること、の3点である。

目的①については、転校経験の有無にかかわらず大学生一般を対象とし、転校に対して共有しているイメージを抽出する。具体的な方法としては、20通りの答えを記述させることによって個人の自己概念を査定する方法である20答法を応用的に用いる。

目的②と③については、現在大学生であり、義務教育である小中学校の間に転校を経験した人を対象とする。転校経験者がその危機に対してどのような意味づけを行うかに注目し、転校によってもたらされた自分の変化などについて自由記述で尋ねる。また転校経験を扱う際には、経験の有無だけでなく国内と国外とを分けて取り上げることとする。なぜなら国外への転校では、文化や言葉の違いなど国内での転校と異なる要素が存在すると考えられるためである。

目的③について、友達関係に対する志向性を測定するために落合・佐藤(1996)の「友達とのつきあい方」尺度を用いる。これは大学生を対象とした、同性の友達とのつきあい方に関する自由記述をもとに作成されたものである。落合・佐藤(1996)によると、青年期の友達とのつきあい方は、「人とかかわり方に関する姿勢(深い/浅い)」「自分がかかわろうとする相手の範囲(広い/狭い)」の2次元からなり、その組み合わせによって4パターンに分類することができる(Figure 1)。本研究ではこの「友達とのつきあい方」尺度をもとに、調査対象者である大学生の友達関係への志向性を分類することとする。そして友達関係への志向性と転校への意味づけとの関連を検討する。仮説として、現在友達との深く狭いかかわり方を志向している人ほど、過去の転校経験を親しい友達との離別の経験としてネガティブに捉えていると予想される。

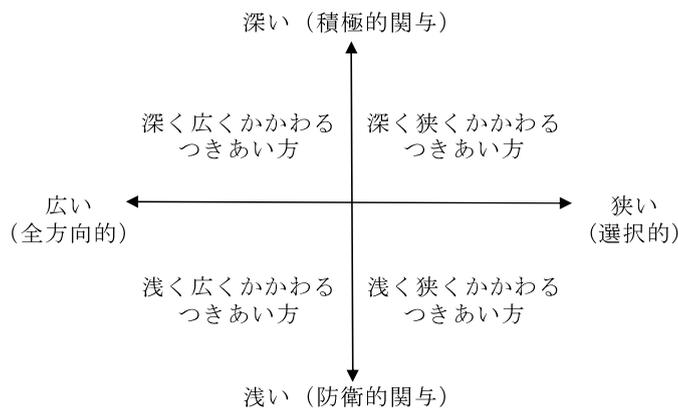


Figure 1 友達とのつきあい方を構成する2次元とつきあい方の4パターン  
(落合・佐藤(1996)を参考に作成)

## 方法

### 調査対象者

大学生 157 人 (男性 32 人, 女性 125 人) に対し, 2012 年 9 月下旬から 10 月下旬にかけて質問紙

を配布した。平均年齢は 20.5 歳 ( $SD = 1.25$ ) であった。このうち転校経験のある人は 57 人、ない人は 100 人であった。転校先としては、国内が 32 人、国外が 25 人であった。また転校経験者のデータが不足していると感じたため、転校経験者を新たに探して質問紙を配布し、追加調査を行った。追加調査では 9 人 (男性 1 人、女性 8 人) から回答を得た。

### 質問紙

質問紙は、(1)フェイスシート、(2)転校に関する 20 答法、(3)「友達とのつきあい方」尺度、(4)転校経験に関する質問、(5)転校経験に関する自由記述から構成された。(4)と(5)については、転校経験のある人のみ回答するよう求めた。

(1) フェイスシート 調査対象者の年齢、性別、小中学校の間の転校経験の有無を尋ねた。

(2) 転校に関する 20 答法 「『転校は』から始まる文を、思いつくままに 20 個作ってください」と教示した。

(3) 「友達とのつきあい方」尺度 落合・佐藤 (1996) の尺度をもとに作成した。ただしこの尺度では、「自分がかかわろうとする相手の範囲 (広い／狭い)」という因子に対して負の高い負荷を持つ因子、つまり「狭くかかわるつきあい方」に当たる項目は含まれていなかった。そこで尺度をより完全な 2 次元の直交パターンに近づけるために、「狭くかかわるつきあい方」についての項目を「広くかかわるつきあい方」の項目を参考に作成した。最終的には、落合・佐藤 (1996) の 35 項目に「多くの人と仲良くする必要はないと思う」など「狭くかかわるつきあい方」についての 12 項目を加えた全 47 項目を使用した。回答の形式は「当てはまる」～「当てはまらない」の 5 件法であった。

(4) 転校経験に関する質問 転校した時期 (学年、学期) と転校した場所 (国外／都道府県外／都道府県内／その他) を尋ねた。

(5) 転校経験に関する自由記述 「転校という経験は、今振り返るとどのようなものだったか」「転校前後で自分の中で何か変化したと思うことはあるか、また転校経験が何かのきっかけとなったことがあるか」「もし転校を経験していなかったら、今の自分は何か違っていると思うか」の 3 点について、自由記述で回答を求めた。自由記述の質問文は、大学生の転機について調査を行った杉浦 (1999, 2004) を参考に作成した。

## 結果と考察

### 分析 1

はじめに大学生 157 人の 20 答法の記述を集計し、大学生が一般に転校に対して共有しているイメージについて分析を行った。

### 20 答法の集計

平均回答数は 15.5 ( $SD = 6.1$ ) であり、合計 2433 の記述が得られた。

まず各記述を単語によって分類した。たとえば「(転校は) 別れが寂しい」であれば「別れ」、「寂しい」、「新しい自分を見つけられるチャンス」であれば「新しい自分」、「チャンス」のように分類

した。次にこれらの単語のうち、意味内容の近いものを一つのカテゴリとしてまとめた。たとえば「寂しい」、「いやだ」、「大変だ」など否定的な感情を表すものをネガティブ感情、「楽しみ」、「ワクワク」、「したい」など前向きな感情をポジティブ感情とした。各カテゴリについて、回答した人数のより多いものを、より一般的なイメージを表すカテゴリであると見なした。具体的には、回答率30%以上(48人以上)のものを転校に対するイメージのカテゴリとして抽出した。

その結果、①ネガティブ感情、②新しさ、③ポジティブ感情、④友達関係、⑤別れ、⑥出会い、⑦親の都合、⑧変化、⑨チャンス、⑩ライフイベント、という10のカテゴリが抽出された (Table 1)。

回答率の最も高かったカテゴリは①ネガティブ感情であり、151人(96%)が回答し、記述数の合計は805(33%)であった。このうち最も回答者数の多かったものは、「寂しい」、「心細い」など孤独感を示す言葉で、83人(53%)が回答した。次に多かった「いやだ」、「したくない」など転校を拒絶する内容は79人(50%)に見られた。他には「大変だ」(78人, 50%)や「不安だ」、「心配だ」などの懸念を表す言葉(69人, 44%)、「つらい」、「苦しい」など苦痛を表す言葉(61人, 39%)など、バリエーションに富んだ内容が見られた。

一方で③ポジティブ感情に言及した回答も104人(66%)に見られたが、記述数の合計は199(8%)であり、ネガティブ語の4分の1に過ぎなかった。その内訳は「楽しみ」、「ワクワク」など期待を表す言葉を回答した人がほとんど(93人, 59%)であり、ネガティブ語に比べて種類は少なかった。

②新しさについては、「新しい」、「新鮮」などの言葉を用いた回答が120人(76%)に見られた。そのうち「新しい友達」、「新しい先生」など出会いや人間関係に言及した人が78人(50%)であった。また52人(33%)は「新しい学校」、「新しい世界」など環境の変化を答えた。他には「新しい自分」、「新しい生活」など、自分や自分を取り巻く生活の新しさに言及した人が36(23%)いた。

④友達関係について記述した人は93人(59%)いた。そのうち「友達が増える」、「人間関係が広がる」などポジティブな側面について答えた人は66人(42%)であり、「友達が減る」、「幼なじみを失う」などネガティブな側面について答えた人は72人(49%)であった。さらに具体的な変化として、「最初はちやほやされる」など周囲の反応に関するものや、「初めは気を遣う」、「友達の大事さを知る」など自分の中での変化について言及するものが見られた。またいじめとの関連性について

Table 1

20答法から得られた転校へのイメージのカテゴリ

カテゴリ	人数 (%)	主な下位カテゴリ
①ネガティブ感情	151 (96%)	寂しい, いやだ (したくない), 大変だ, 不安だ, つらい
②新しさ	120 (76%)	新しい出会い (友達, 先生), 新しい環境 (学校, 世界), 新しい自分
③ポジティブ感情	104 (66%)	楽しみ (ワクワク, 期待)
④友達関係	93 (59%)	友達が増える, 友達が減る, リセット, いじめのきっかけ
⑤別れ	93 (59%)	友達との別れ, 土地との別れ, 先生との別れ
⑥出会い	76 (48%)	友達との出会い, 先生との出会い, 土地との出会い
⑦親の都合	64 (41%)	親の都合である, 仕方ない (どうしようもない)
⑧変化	58 (40%)	環境の変化, 自分の変化, 学校の変化, 学校生活の変化, 友達の変化
⑨チャンス	50 (32%)	友達が増える, 心機一転の, 成長の, 異文化を知る
⑩ライフイベント	49 (31%)	大きな経験, 自分を成長させる経験, 人生に影響するもの, 転機

も 26 人 (17%) が指摘した。そのほとんどが、転校がいじめの原因となりうるというものであった。

⑧変化については 58 人 (40%) が記述していたが、その内容にはバリエーションが見られた。たとえば 25 人 (20%) は環境の変化を、16 人 (10%) は自分の変化を表していた。その他、「学校が変わる」(9 人, 6%), 授業や給食など具体的な学校生活の変化 (6 人, 4%), 「友達が変わる」(5 人, 3%) などがあった。

転校を⑨チャンスであるとした回答は 50 人 (32%) から得られた。その具体的な内容としては、「友達が増えるチャンス」など友達関係に言及したものが 22 人 (14%) 見られた。また「新しい自分を見つけるチャンス」、「心機一転」など自分の変化について述べた人も 20 人 (13%) いた。他には、「成長のチャンス」(8 人, 5%), 「異文化を知るチャンス」(5 人, 3%) などがあった。

転校を人生において大きな出来事であるとする回答は 49 人 (31%) から得られ、このカテゴリを⑩ライフイベントと名付けた。転校は「大きな経験」であるとした記述 (25 人, 16%) が最も多く、また転校が「自分を強くする」、「世界を広げる」出来事として、自分の成長につながると言及した回答が 17 人 (11%) から得られた。さらに「将来に影響する」、「価値観に影響を与える」など人生や性格への影響を述べた回答をした人は 14 人 (9%) 見られた。

#### 転校経験と転校に対するイメージの関連

抽出された転校に対するイメージについて、転校経験との関連を検討した。転校経験を無/国内/国外の 3 群に分け、特定のカテゴリを記述する人数の比率に差が見られるかどうかを検討した (Table 2)。なお( )内は、各群における回答者数の割合を示している。

カイ二乗検定を行ったところ、各カテゴリの回答率に転校経験による差は見られなかった。したがってこれら 10 のカテゴリは、実際に転校を経験したか否かによらず、転校に対して大学生が抱く一般的なイメージを表していると考えられる。

以上より、大学生が共有するイメージとして、転校は多くのネガティブな要素と結びつきつつ、ネガティブな感情とポジティブな感情を併せ持つものであり、対人関係や環境が新しくなるもので、別れと出会いに伴う友達関係の変化を経験するものであると示された。特にネガティブ感情についてはその数もバリエーションも多く、また転校の原因として「親の都合」という自分では統制でき

Table 2  
転校経験別 各カテゴリの回答者数 (人)

		①ネガティブ	②新しさ	③ポジティブ	④友達関係	⑤別れ
転校経験	無	96 (96%)	82 (82%)	68 (68%)	60 (60%)	63 (63%)
	国内	32 (100%)	22 (69%)	18 (56%)	17 (53%)	18 (56%)
	国外	24 (96%)	16 (64%)	18 (72%)	16 (64%)	12 (48%)
	合計	152	120	104	93	93
		⑥出会い	⑦親の都合	⑧変化	⑨チャンス	⑩ライフイベント
転校経験	無	46 (46%)	45 (45%)	33 (33%)	32 (32%)	28 (28%)
	国内	18 (56%)	11 (34%)	14 (44%)	9 (28%)	11 (34%)
	国外	12 (48%)	8 (32%)	11 (44%)	9 (36%)	10 (40%)
	合計	76	64	58	50	49

注) 各群の人数は、無:n = 100, 国内:n = 32, 国外:n = 25, ( )内の%はこれを100とした割合

ないものが挙げられていることから、転校が危機として経験されやすいことが示唆された。一方で、環境や友達、さらには自分自身について様々な変化を経験し、それがチャンスとなり得ることや、その後の人生にまで影響を及ぼすライフイベントとして経験され得ることが考えられる。

## 分析 2

次に 157 人の回答から、「友達とのつきあい方」尺度について因子分析と信頼性の検討を行った。またこの結果をもとに、調査対象者の「友達とのつきあい方」を 4 パターンに分類した。

### 因子分析

各項目の回答について、「当てはまらない」から「当てはまる」に 1 点から 5 点を付与し、項目平均得点と標準偏差を算出した。項目分析の結果、天井効果が見られ、項目内容もふさわしくないと考えられた 3 項目を、以降の分析から除外した。

本研究では「友達とのつきあい方」について二次元構造を想定していたため、残りの 44 項目について最尤法・Varimax 回転によって 2 因子を抽出する因子分析を行った。欠損値はペアごとに除外した。結果から、複数の因子にまたがっていたり因子負荷量の低かった 17 項目を分析の過程で除外した。Varimax 回転後の最終的な因子パターンを Table 3 に示した。

それぞれの因子は、落合・佐藤 (1996) における 2 つの因子と同様の概念を表していたため、第 1 因子を「人とかかわり方に関する姿勢」、第 2 因子を「自分が関わろうとする相手の範囲」と名付けた。Chronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、「人とかかわり方に関する姿勢」では  $\alpha = .869$ 、「自分が関わろうとする相手の範囲」では  $\alpha = .855$  と十分な値が得られた。

### 「友達とのつきあい方」パターン

調査対象者ごとに「友達とのつきあい方」尺度の 2 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出した。このとき負の負荷量を示した項目については、逆転処理を行った。第 1 因子の下位尺度得点を「人とかかわり方に関する姿勢」得点 (平均 3.30,  $SD = 0.60$ )、第 2 因子の下位尺度得点を「自分がかかわろうとする相手の範囲」得点 (平均 3.37,  $SD = 0.74$ ) とした。

次に各下位尺度得点が平均より高いか低いかによって、調査対象者の友達とかかわり方を 4 パターンに分類した。「人とかかわり方に関する姿勢」得点が平均より高ければ「深いかかわり」、低ければ「浅いかかわり」とした。同様に「自分がかかわろうとする相手の範囲」得点が平均より高ければ「広いかかわり」、低ければ「狭いかかわり」とした。さらにその組み合わせによって、「深く広くかかわるつきあい方」(A 深広)、「深く狭くかかわるつきあい方」(B 深狭)、「浅く広くかかわるつきあい方」(C 浅広)、「浅く狭くかかわるつきあい方」(D 浅狭)の 4 パターンに分類した。

転校経験 (無/国内/国外) 別の「友達とのつきあい方」パターンの内訳を Table 4 に示した。カイ二乗検定を行ったところ、転校経験による「友達とのつきあい方」パターンに差は見られなかった ( $\chi^2 = 10.40, df = 6, p = .11$ )。したがって「友達とのつきあい方」は個人の志向性を表しているものであり、転校経験による影響を受けるものではないと考えられる。

Table 3  
「友達とのつきあい方」尺度の因子分析結果 (Varimax回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	
〈I : 人とのかかわり方に関する姿勢〉 $\alpha = .869$			
40 友達と本音でぶつかり合っても平気である	.771	-.047	
11 友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい	.657	-.046	
10 友達と意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える	.656	-.125	
21 友達と本音を言い合うことで、傷ついても仕方ない	.623	-.044	
30 友達と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない	.607	-.018	
27 少しぐらい傷つくことが合っても、自分のありのままで接したい	.568	.001	
19 友達と意見や考えが食い違っても自信をなくしたりしない	.543	-.136	
41 友達とは何でも本音で話し合うようにしている	.530	.034	
7 みんなと意見が違っても、出来るだけ自分の意見を言うようにしている	.484	-.116	
42 友達と分かり合おうとして傷つきたくない*	-.475	.135	
44 傷つきたくないのに、友達には本当の姿を見せられない*	-.469	.038	
26 友達と本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまうことはない	.469	-.109	
38 友達とは、互いに傷つくような本音の話はしないようにしている*	-.435	.210	
33 友達にはありのままの自分は出せない*	-.418	.017	
4 友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない	.416	-.014	
36 友達と意見を交し合っても、それほど惑わされない	.389	-.127	
23 友達と本音で話すのは避けている*	-.384	-.024	
〈II : 自分がかかわろうとする相手の範囲〉 $\alpha = .855$			
45 どんな人とも仲良くしようと思う	-.009	.847	
28 どんな人ともずっと友達でいたい	-.046	.764	
1 どんな友達とも仲良しでいたい	-.057	.729	
17 どんな友達とも楽しく付き合いたい	.055	.670	
35 どんな友達とも協調し合いたい	-.038	.641	
14 みんなに好かれていたい	-.225	.503	
24 みんなから愛されていたい	-.222	.496	
43 どんな人ともずっと友達でいたいとは思わない*	.017	-.484	
15 多くの人と友達になろうとは思わない*	.031	-.481	
39 多くの人と仲良くする必要はないと思う*	.100	-.399	
	因子寄与	4.97	3.96
	累積寄与率 (%)	18.41	33.09

\* は逆転項目

Table 4  
転校経験と「友達とのつきあい方」パターンのクロス集計表 (人)

		友達とのつきあい方パターン				
		A深広	B深狭	C浅広	D浅狭	合計
転校経験	無	29	19	32	20	100
	国内	6	11	8	7	32
	国外	3	10	10	2	25
	合計	38	40	50	29	157

### 分析 3

157 人の調査対象者のうち転校経験者であった 57 人と、追加調査の 9 人を合わせた 66 人を対象とし、転校に対する意味づけの自由記述の分析を行った。66 人のうち 36 人が国内での転校を、30 人が国外への転校を経験していた。また転校経験への意味づけと、転校先、「友達とのつきあい方」パターンとの関連をそれぞれ検討した。

#### 転校経験への意味づけ

自由記述の内容をもとに、転校という経験がその人にどのような変化や影響を与えたのかについて分析を行った。自由記述では、「転校という経験は、今振り返るとどのようなものだったか」、「転校前後で自分の中で何か変化したと思うことはあるか、また転校経験が何かのきっかけとなったことがあるか」、「もし転校を経験していなかったら、今の自分は何か違っていると思うか」の 3 点について尋ねた。質問の形式は異なるが、どれも転校経験を今どのように意味づけているかを問うものであったため、3 つの間に対する回答を総合して扱った。

まず各記述を、意味内容のまとまりごとに分類した。たとえば「自分の知らないタイプの人間に出会えるので世界が広がる」という記述は、「自分の知らないタイプの人間」「出会える」「世界が広がる」のように分類した。次にこれらを内容の近いもの同士でまとめ、一つのカテゴリとした。転校経験は個性が大きいと、より多様な意味づけを抽出することを意図し、回答率 10%以上（7 人以上）のものを、転校への意味づけカテゴリとした。その結果、①性格への影響、②対人関係におけるスキルや価値観への影響、③価値観や世界観の変化、④きっかけ、⑤進路への影響、⑥ネガティブなものからポジティブなものへ、という 6 つの意味づけカテゴリが抽出された (Table 5)。

最も多かったのは①性格への影響について言及するものであり、34 人 (52%) が性格の変化について記述していた。たとえば「異なる環境に行くことによって苦しい経験も楽しい経験も積んだ。自分の性格に少し影響を与えていると思う」、「(転校していなかったら) もっと学校嫌いで暗い性格になっていたと思う」などの記述が得られた。特に「活発になった」、「社交的になった」など、外向的な性格になったと意味づける人が 14 人 (21%) いた。たとえば「あまり自分から話すこともなく、一定の人としか話さなかったけど、転校をきっかけに自分からいろいろな人に質問をしたり、自ら話しかけるようになった」などがある。したがって転校先での友達作りにおける適応的なスタイルとして、性格が外向的に変化したと感じている可能性が考えられる。一方で、「引っ込み思案に

Table 5  
自由記述から得られた転校への意味づけのカテゴリ

カテゴリ	人数	主な下位カテゴリ
①性格への影響	34 (52%)	活発になった、引っ込み思案になった、人に気をつかうようになった
②対人関係のスキル・価値観	21 (32%)	友達とのコミュニケーションの取り方を学んだ、人間関係観が変わった
③価値観・世界観	18 (27%)	多様性を学んだ、物の見方が変わった、自分に対する価値観が変わった
④きっかけ	10 (15%)	習い事を始めるきっかけ、変わるきっかけ、成長のきっかけ
⑤進路	10 (15%)	中学受験のきっかけ、帰国子女入試
⑥ネガティブからポジティブへ	28 (42%)	“初めはいやだったが、慣れたら楽しかった”、“当時は否定的に考えていたが、今振り返ると肯定的に捉えることができる”

なった」、「消極的になった」など、転校によってかえって内向的になったとする人も6人(9%)いた。その記述内容を検討すると、「いきなり言葉のわからない海外への転校だったので、かなり苦勞した。逆に帰国した時は、日本の勉強や周りの友人の話題について行けず苦勞した」のように、転校先での苦勞やネガティブな経験についての内容が見られた。したがって転校先で比較的うまく適応できたと捉えている人は、転校によって現在の外向的な性格を獲得することができたと意味づけ、やや難しかったと感じる人は、転校と自身の内向性を結びつけて考えている可能性がある。

②対人関係のスキル・価値観については、21人(32%)がその変化について言及した。具体的には、「初対面の人とでも明るく振舞えるし、今の自分があるのは転校でトレーニングしてきたからかなと思う」と人とのつきあい方に言及したものや、「自分にとっての当たり前が通用しない人たちがいるということが、実感を持ってわかるようになった」など対人関係観そのものの変化を経験したとする記述が見られた。

転校が③価値観や世界観に影響を及ぼしたとする記述は、18人(27%)に見られ、多くの人に出会うことによって「多様性を学んだ」、「物の見方が変わった」とする内容が複数見られた。また外界に対する価値観だけでなく、自分に対する価値観やアイデンティティについて考えるきっかけとなったと意味づける回答も見られた。たとえば『自分とは何か』みたいなことを転校してから思われるようになりましや、「自分は自分だと思えるようになった。転校がそのきっかけになった」などがあつた。箕浦(1990)によると、子どもは自分が育っている社会において、その文化の意味体系(価値観・世界観)を取り入れながら自らの心を形成し、さらに他の意味世界にさらされてはじめて自らの意味体系が意識される。したがって社会性やアイデンティティの形成途上にある小中学生の間に転校を通じて複数の文化に接することは、発達に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

④きっかけについては、具体的な習い事や部活を始めるきっかけになったとする回答の他、「変わるきっかけ」、「成長するきっかけ」とする意味づけも見られた。中には転校を「大きなきっかけ」と表現し、「大きな衝撃がありました。目が開けたような。転機でした」と述べる人がいた。具体的には、「低学年から高学年への境目だったこともあり、クラス内の人間関係の中でどう生きていくか、という視点を持つようになった」と、対人関係観への影響があつたと意味づけていた。

⑤進路への影響については、主に調査を行った大学が帰国生入試を設けていることもあり、「もし転校していなかったら、どのような進路を辿っていたか気になったことがあります。海外に転校して帰国子女として受験に挑んだので」など、現在の進路への影響について言及した人が複数見られた。さらに進路選択と今の自分に連続性を見出し、そのすべてのきっかけが転校にあつたと見なす意味づけも見られた。たとえば「(転校をしていなかったら)中学受験していない。よって母校には通っていない。おそらく私はこうなっていない。すべてが違っていた」という人は、進路選択のきっかけとなった転校を、人生の選択においても重要な出来事であつたと捉えていると考えられる。

転校に対する意味づけの特徴として、ネガティブまたはポジティブとわりきったものよりも、その両方を含み、かつ⑥「ネガティブなものからポジティブなものへ」というパターンを示す人が比較的多く見られた(28人, 42%)。具体的には、「最初は不安だったけれど、新しい学校も楽しかった」、「別れは悲しかったが、新しい友達に出会えたことは自分にとってプラスになったと思う」のよう

に当時の感情の移り変わりを表すものや、「今振り返ると」というニュアンスを含む「転校前は嫌だったが、今では良い経験ができて親に感謝している」、「(苦勞したなど)とだけ書くとネガティブな印象のようですが、転校がなかったらという想像ができないくらい人生において重要な位置づけ。たくさん苦勞はあったけどその分出会いもあったし、今となっては良い思い出」などが見られた。

以上6つのカテゴリに分類したように、転校経験者の73% (48人) が転校に伴う自分の変化や成長について言及していた。したがって転校は経験した多くの人にとって、現在の自分につながる転換点であったと意味づけられるものであると考えられる。すなわち転校は、「自分や他者に対する見方を大きく転換させ、時には世界を全く異なった視点から見ることができるようになるような、大きな転換」(杉浦, 2004) という「転機」の定義に合致すると言える。さらにカテゴリ⑥のように、転校への意味づけが時間によってネガティブなものからポジティブなものへと変化したプロセスを表しているものが見られた。これは、転機について語ることは「転機とされたきっかけからいくつかのプロセスを経て今に至ったという一連の出来事を、今ここで再構成して語っている」ことであるとす杉浦 (2004) の主張と一致する。すなわち、初めは環境移行による危機として経験された転校について、今振り返ってみたとき多くの人々がポジティブな意味を見出しており、それによって自分の成長を再認識していると考えられる。

ただし、「あまり大きな印象はない」、「特になし」など、意味づけを行わない回答も18人 (27%) に見られた。特に意味づけがないとする人についても、何らかの特徴がみられる可能性があると考えられるため、以下の分析の対象とした。

#### 転校先との関連

転校経験の意味づけのカテゴリについて、転校先 (国内/国外) によって差がみられるかを検討した (Table 6)。なお()内は、各群における回答者数の割合を示している。統計的有意差の検討にはデータ数が十分でなかったため、該当する内容が出現する割合を単純比較した。その結果⑤進路への影響について言及した人は、国内群では8% (3人) であったのに対し、国外群では23% (7人) と2.9倍多かった。このような差が見られた理由としては、前述のように調査を行った大学が帰国生入試を設けていることも大きく影響していると考えられる。しかし進学先の選択だけでなく、「(転校していなかったら) まず帰国枠受験できなかったのもこの大学に来れなかった。英語を好きになるきっかけは無かったと思うため、きっと高校の英語教師でなく、元々子どもが好きな幼稚園の教師を目指していたと思う」のように、将来の職業についても影響を受けたと意味づける記述が見られた。

Table 6  
転校経験別各カテゴリの回答者数 (人)

		①性格	②対人関係	③価値観	④きっかけ	⑤進路	⑥ネガティブから ポジティブへ	意味づけ なし
転校経験	国内	17 (47%)	13 (36%)	8 (22%)	7 (19%)	3 (8%)	14 (39%)	11 (31%)
	国外	17 (57%)	8 (27%)	10 (33%)	3 (10%)	7 (23%)	14 (47%)	7 (23%)
	合計	34	21	18	10	10	28	18

注) 各群の人数は、国内:n = 37, 国外:n = 29, ()内の%はこれを100とした割合

また①性格への影響については大きな差は見られなかったが、その下位カテゴリである「性格が外向的になった」とする回答について、国内群では14% (5人)であったのに対し、国外群では30% (9人)と2.1倍の差が見られた。国外への転校を経験した人の中には「引っ込み思案で大人しく消極的だったが、外国人の人にはっとかかれたことで自ら働きかけるようになり、積極的になった」のように、外向的な性格になることを余儀なくされたとする記述が見られた。

以上より国外への転校を経験した人は、国内での転校経験者よりも、転校経験が性格や進路など自分の将来に大きく影響したと捉えていることが示唆される。小泉 (1999) は国外への転校を、数ある環境移行の中でも「最も劇的な変化を伴う環境移行事態」と評しており、それだけ重大な出来事として環境移行を経験した可能性が考えられる。

### 「友達とのつきあい方」のパターンとの関連

「友達とのつきあい方」パターンのA深広、B深狭、C浅広、D浅狭の4つによって、転校経験の意味づけに差異が見られるかを検討した (Table 7)。各パターン的人数は、A深広:12人、B深狭:24人、C浅広:19人、D浅狭:11人であった。各カテゴリについて、その内容を記述した人数の比率を比較した。以下( )内の%は、各パターンでその記述をしている人の割合を表す。

統計的な有意差の検討にはデータ数が十分でなかったため、該当する内容が出現する割合を単純比較した。⑤「進路への影響」を除き、①～⑥のカテゴリではA深広の回答率が高いことが示唆された。特に⑥「ネガティブからポジティブへ」という記述は、A深広では67% (8人) と他のパターンより多く見られた (Figure 2)。また「意味づけなし」という回答は、B深狭、C浅広、D浅狭では20%～40%見られたのに対し、A深広では0人であった (Figure 3)。

以上より深く広くかかわるつきあい方をしている人は転校に対し何らかの意味づけをしており、他のパターンよりもポジティブな意味づけをしている可能性が示唆された。

また「性格への影響」については、A深広 (67%, 8人) とC浅広 (63%, 12人) が他の2つのパターンよりやや多く見られた (Figure 4)。したがって「広いかわり」を志向する人の方が「狭いかわり」を好む人よりも、転校が性格に影響を及ぼしたと捉える傾向がある可能性がある。

以上から、「友達とのつきあい方」パターンによって転校への意味づけが異なる可能性が示唆された。特に深く広いかわりを志向する人は、転校に対しポジティブな意味づけをしている可能性が示唆された。この理由として、「深いかわり」を志向する人は新しい環境でも友達に対して積極的

Table 7  
「友達とのつきあい方」パターン別各カテゴリの回答者数 (人)

	①性格	②対人関係	③価値観	④きっかけ	⑤進路	⑥ネガティブからポジティブへ	意味づけなし
A深広	8 (67%)	5 (42%)	5 (42%)	4 (33%)	1 (8%)	8 (67%)	0 (0%)
B深狭	10 (42%)	7 (29%)	7 (29%)	2 (8%)	8 (33%)	10 (42%)	9 (38%)
C浅広	12 (63%)	6 (32%)	4 (21%)	3 (16%)	1 (5%)	7 (37%)	4 (21%)
D浅狭	4 (36%)	3 (27%)	2 (18%)	1 (9%)	0 (0%)	3 (27%)	5 (45%)
合計	34	21	18	10	10	28	18

注) 各群の人数は、A深広:n=12, B深狭:n=24, C浅広:n=19, D浅狭:n=11, ( )内の%はこれを100とした割合

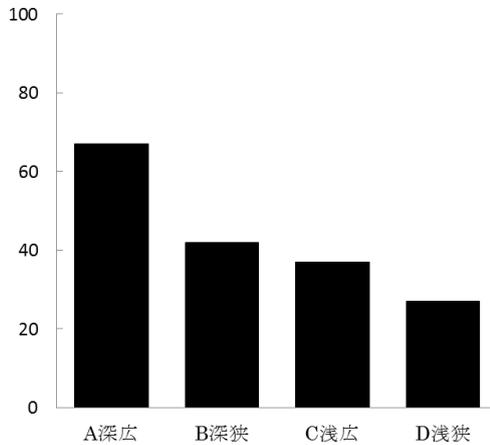


Figure 2 パターン別「ネガティブからポジティブへ」の回答者の割合 (%)

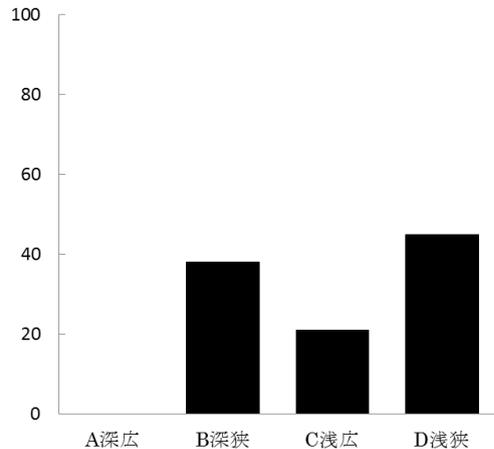


Figure 3 パターン別「意味づけなし」の回答者の割合 (%)

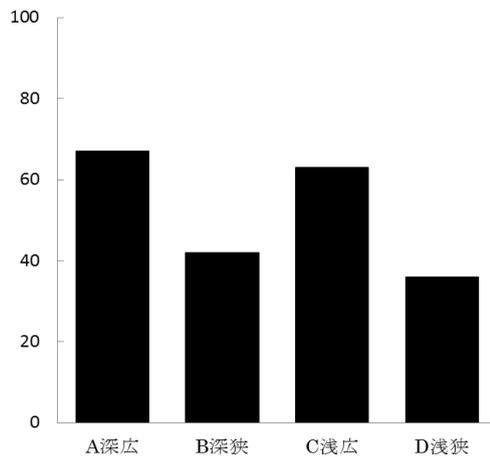


Figure 4 パターン別「性格への影響」の回答者の割合 (%)

に関わろうとし、また「広いかわり」を志向する人にとって転校はより多くの友達と出会うことができるものとして捉えるため、ポジティブな意味づけがしやすかった可能性がある。すなわち現在多くの友達と積極的にかかわることを志向している人は、転校経験が現在の自分にとってプラスの出来事であったと捉えることができたと考えられる。本研究では因果関係は検討していないが、現在の友達関係への志向性と過去の転校経験への意味づけが相互に影響していることが示唆された。

## 総合考察

### 1. 本研究の成果

本研究の目的は、大学生が過去の転校経験を振り返った時に、転機として、あるいは自己の変化をもたらした経験として転校をいかに意味づけるのかを検討することであった。具体的には、①20 答法によって抽出されたイメージから、転校がどのような環境移行であるかを探索的に検討すること、②自由記述から転校経験者の転校への意味づけを探ること、③意味づけの要因の一つとして現在の「友達とのかかわり方」との関連を検討すること、の3点を目的とした。その結果、1. 転校のイメージはネガティブな感情と結びついており、危機として経験されやすいこと、2. 転校経験は振り返った時、性格や対人関係、価値観等に影響を与えた出来事として意味づけられること、3. 現在多くの友達と積極的にかかわることを志向している人は、転校経験をよりポジティブなものとして意味づけられること、が示された。また転校経験者の多くが、転校を通じて自分の変化や成長があったと意味づけていることから、転校は転機となりうる環境移行であると考えられた。

## 2. 本研究の限界と今後の展望

本研究では、転校経験者が過去を振り返ったときどのように意味づけるかという視点から、転校という出来事を扱った。このことにはメリットとデメリットがあったと考えられる。メリットとして第一に、転校を一時点での出来事としてではなく、現在につながる連続性を持った出来事として捉えられたことが挙げられる。杉浦 (2004) は、発達における変化のプロセスを取り扱うためには、「語り」という概念が不可欠であると主張している。本研究においても意味づけという一つの語りを用いたことにより、小中学生の出来事から大学生の現在というある程度長いスパンから、転校による自己の変化の過程を検討することができた。また第二に、転校が転機となりうることを示すことができた。横島 (2012) は「転校には問題点も生じるものの、転機として自己の飛躍をもたらす要因がひそんでいる可能性がある」と指摘したが、具体的なエピソードを挙げるにとどまっていた。本研究では大学生という比較的同時期に転校を経験した人を対象とし、その記述の中から転校への意味づけを見出すことによって、どれくらいの人が転校を転機であったと感じているのか、またどのような転機であったのかについて示すことができた。一方でデメリットは、それが現在の自身の解釈であり、当時どのように感じていたかを示すものではないということである。すなわち現在転校に対して抱いているイメージを、そのまま当時も同じように経験していたとすることはできない。実際の子どもたちは、記述に表れていたよりもダイナミックに転校を経験していると考えられる。

また反省点として、転校に至る個別の背景を考慮することなく、大雑把にひとまとめにして扱ってしまったことが挙げられる。たとえば転校の理由として、離婚など家庭環境の大きな変化を伴っている場合が考えられる。その場合、子どもは環境の変化だけでなく家庭内の変化にも適応していくことが求められ、移行はより複雑な様相となると思われる。また本研究では国外への転校について特別に取り上げることは目的としなかったが、分析2より、国外への転校経験者は転校が自分の将来に影響したと捉えている人がより多い可能性が示唆された。したがって国際化に伴い海外への転勤や移動も多く生じる現代社会においては、国外への転校に着目したさらなる研究が求められる。

本研究では転校の前向きな側面に注目したが、転校にはネガティブなイメージも強い。特に友達関係における問題が生じやすくなるため、いじめのきっかけとなることを心配する声もある。横島 (2012) は、転校生は一種の弱者であり、スケープゴート化されやすい立場であると指摘している。

教師をはじめとする周囲の大人は、転校生の不安や孤独感などネガティブな面をサポートしつつ、長い目で転校生の適応を見守ることが必要だろう。また本研究で見られたように転校が何かのきっかけとなることもありうるため、その子の良さを伸ばすようなきっかけを与えることが期待される。

本研究は転校という環境移行に注目したが、ライフサイクルに応じて生じる他の環境移行との相違点や共通点を見出すことができる。相違点としては、ほぼすべての人が年齢に応じて経験する環境移行と異なり、転校は特定の人のみが経験することである。それだけにネガティブなイメージを持たれやすいことが、20 答法の結果からも示唆された。また共通点としては、移行する時点では不安定で危機的な出来事として経験されうることである。そしてその危機を乗り越えることによって何らかの成長や価値観の転換が生じ、その後の人生を左右する転機ともなりうるということである。

人は発達に伴って様々な環境移行を経験するが、その危機の主観的な経験やその後の人生への影響についてはあまり検討されていない。ある出来事が人生全体から見たときにどのような意味を持つかを考えるとき、本人の主観的な語りを抜きに検討することはできない。したがって環境移行について、質的な方法やデータを用いたさらなる研究が行われることが期待される。

## 引用文献

- 古川雅文・小泉令三・浅川潔司 (1992). 小・中・高等学校を通じた移行 山本多喜司・S.ワップナー (編著) 人生移行の発達心理学 北大路書房. pp.152-178.
- 小泉令三 (1986). 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究, **34**, 289-296.
- 小泉令三 (1987). 受け入れ学級のクラス替えが転校児童の交友関係に与える影響 教育心理学研究, **35**, 197-203.
- 小泉令三 (1997). 小・中学校での環境移行事態における児童・生徒の適応過程 風間書房
- 小泉令三 (1999). 日本人の子どものアメリカ社会への適応 福岡教育大学紀要, **48**, 4, 185-194.
- 箕浦康子 (1990). 文化のなかの子ども 東京大学出版会
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 杉浦 健 (1999). 転機の研究 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 607.
- 杉浦 健 (2004). 転機の心理学 ナカニシヤ出版
- 塚本美恵子 (1990). 新しい環境への適応：適応の概念と転校生の学校適応に関する調査報告(1) 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, **32**, 111-133.
- 内野康人之・横島 章 (1977). 転校生の適応過程に関する研究 (II) 日本教育心理学会総会発表論文集, **19**, 876-877.
- 山本多喜司・S.ワップナー (1992). 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 横島 章 (1976). 転校生の適応過程に関する研究 (I) 日本教育心理学会総会発表論文集, **18**, 450-451.
- 横島 章 (2012). 転校を転機に生かす教育心理学的アプローチ 明石書店